

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成25年度病虫害発生予報第7号（10月）について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

10月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	並 やや少	並 並	やや多 並
かんきつ	ミカンハダニ	並	並	並
かき	炭疽病	並	並	並
果樹共通	カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多 (前年比*注①)	多 (平成23年比*注①)	多
冬春イチゴ	炭疽病 ハダニ類	少 やや少	やや少 並	やや少 並
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ ハスモンヨトウ オオタバコガ	やや少 やや少 やや少	並 並 並	少 並 並

注①：果樹共通・カメムシ類の発生量の平年比は、年次変動が大きいため、「現況」については前年比、「10月の発生予報」については、発生状況が類似している平成23年比としている。

<予想される向こう1か月の天候（平成25年9月21日～10月20日）>

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
向こう1か月の気温は平年より高いでしょう。降水量と日照時間は平年並でしょう。
週別の気温は、1週目は平年並でしょう。2週目以降は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	30	50
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

（福岡管区气象台 平成25年9月20日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

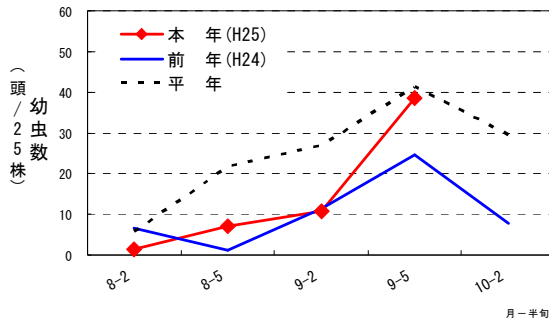
(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

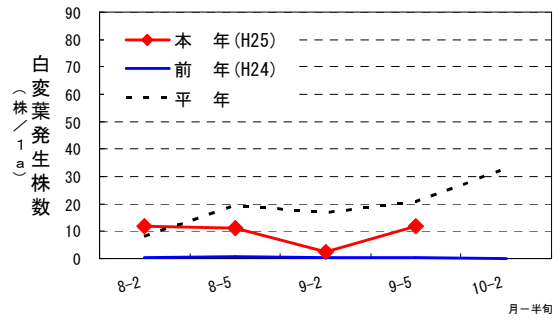
1 a 当たり白変葉株数 11.9 株（平年 20.5 株、前年 0.3 株）

25 株当たり幼虫数 38.7 頭（平年 41.3 頭、前年 24.7 頭）

発生ほ場率 82.4%（平年 81.8%、前年 85.7%）



大豆におけるハスモンヨトウの幼虫密度の推移



大豆におけるハスモンヨトウの白変葉発生株率の推移

イ 県下3か所のフェロモントラップにおける9月1～5半旬の合計誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（-）。

筑紫野市 1,271 頭（過去8か年平均 2,136 頭、前年 1,271 頭）

柳川市 3,103 頭（過去4か年平均 4,572 頭、前年 5,577 頭）

行橋市 1,063 頭（過去3か年平均 670 頭、前年 341 頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並みとされている（+）。

(3) 防除上の注意

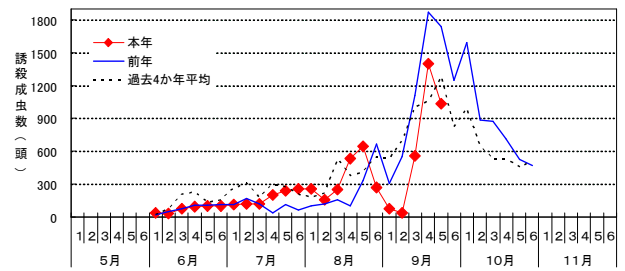
ア 地域によって発生に差があるため、必ずほ場での発生状況を確認し、ふ化幼虫が群生した白変葉が発生して加害が続いている場合は早急に防除を行う。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去する。

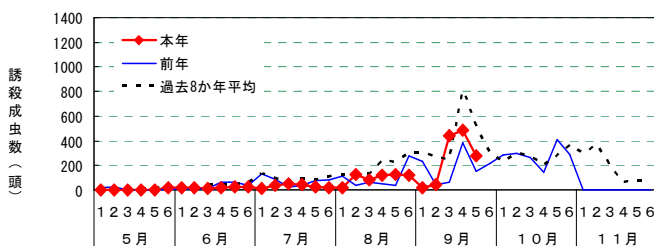
ウ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

中・老齢幼虫が混発している場合は、これらの幼虫にも効果の高い薬剤で防除を行う。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、P8の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

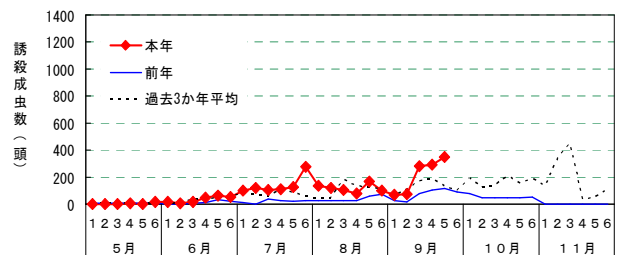


フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺数の推移(筑後市)



フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺虫数の推移(筑紫野市)

月-半旬



フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺虫数の推移(行橋市)

月-半旬

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

主要3種カメムシ（アオカメシ、イモシカメシ、ホハリカメシ）

25株当たり虫数 0.4頭（平年 1.0頭、前年 0.9頭）

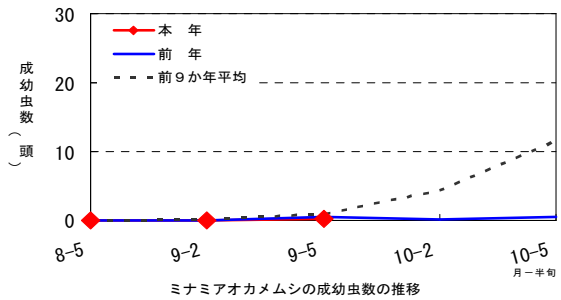
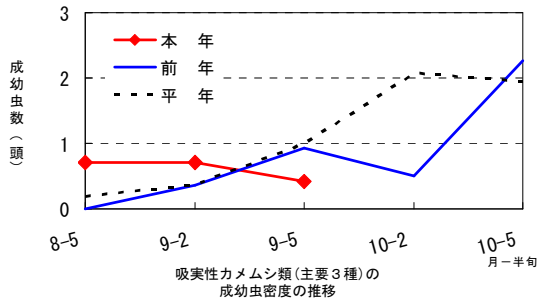
発生ほ場率 23.5%（平年 31.4%、前年 46.7%）

ミナミアオカメムシ

25株当たり虫数 0.2頭（過去9か年平均 0.9頭、前年 0.5頭）

発生ほ場率 11.8%（過去9か年平均 16.6%、前年 20.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（＋）。



(3) 防除上の注意

ア 吸実性カメムシ類の加害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除を行う。

イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。

なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ 無防除のほ場では10月に発生量が急増する場合がありますので、発生状況には十分注意する。

【普通作物：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
水稻 ヒメトビウンカ	多	—	—	<ul style="list-style-type: none"> イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカは、収穫後のイネ株等で越冬し翌年の発生源となる。 イネ刈株からの再生株が罹病株の場合、これを吸汁したヒメトビウンカは縞葉枯ウイルスの保毒虫となり保毒虫率を高める要因となるため、収穫後は速やかに刈株をすき込む。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

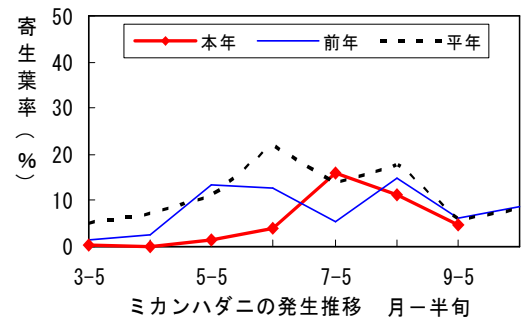
寄生葉率 1.2%（平年 1.1%、前年 0.7%）

発生ほ場率 46.2%（平年 41.2%、前年 50.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。



- イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 農薬の使用および散布等にあたっては、P 8の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

【果樹：かき】

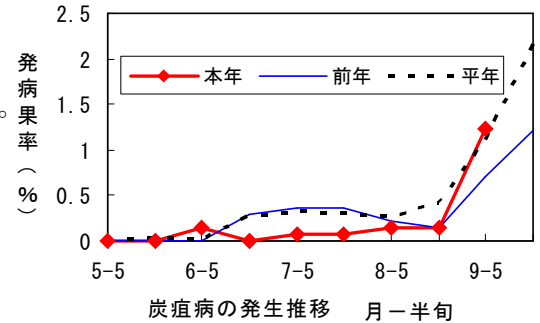
1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発病果率 0.7 %（平年 1.1%、前年 1.4%）
発生ほ場率 46.2 %（平年 38.6%、前年 42.9%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないとされている（±）。



(3) 防除上の注意

- ア 伝染源である罹病枝及び罹病果は除去・処分する。
- イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園では、薬剤防除を徹底する。

【果樹：共通】

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

(1) 予報の内容

発生量：前年より多（平成23年<類似年>より多）

＜参考：チャバネアオカメムシの発生状況＞			
	本年	前年	前々年 ＜類似年＞
越冬量(頭/m ²)	0.7	3.2	0.7
ヒキ球果着生量	中	少	中
発生型	—	7～8月多発	後期

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯における9月1～4半旬の誘殺数は、前年、前々年より多かった（前年比：+）。
筑紫野市 23,942頭（前年 787頭、前々年 3,212頭）
朝倉市杷木町 379頭（前年 236頭、前々年 115頭）
八女市黒木町 6,292頭（前年 774頭、前々年 1,788頭）

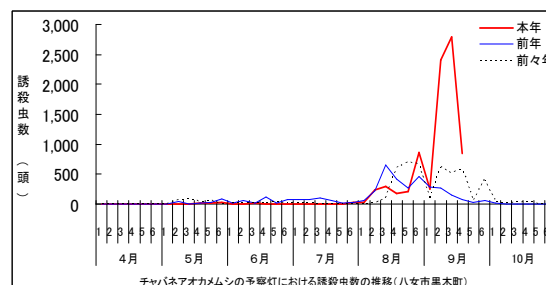
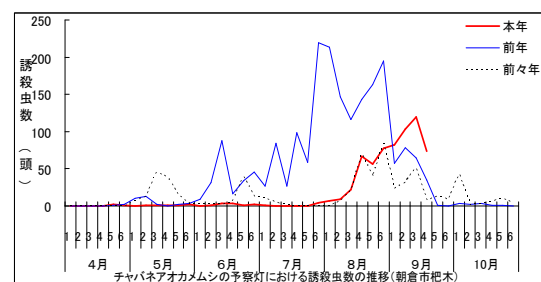
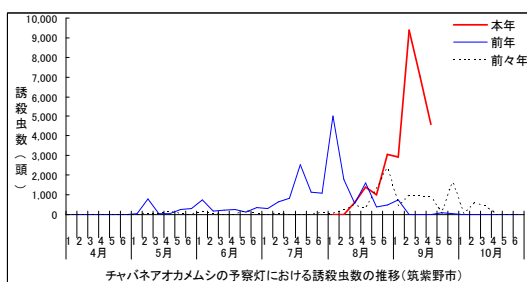


図 県下3ヶ所の予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数の推移

注) 筑紫野市は、予察灯故障のため4月1半旬～8月1半旬までデータなし。

イ カキの被害果は前年、前々年より多かった（前年比：+）。

被害果率 7.9%（前年 0.6%、前々年 1.4%）

発生ほ場率 53.8%（前年 28.6%、前々年 46.2%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア チャバネアオカメムシは基本的に夜行性であるが、夜温が低下する10月以降は、昼間も移動し果実を吸汁加害するので、昼間の果樹園への飛来にも注意する。

イ 最新の果樹カメムシ類の発生状況については、病害虫防除所ホームページを参照する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
カキ ゾコカカケラムシ	並	並	やや多	

【野菜：冬春イチゴ】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 0.05%（過去9か年平均 0.50%、前年 0.47%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

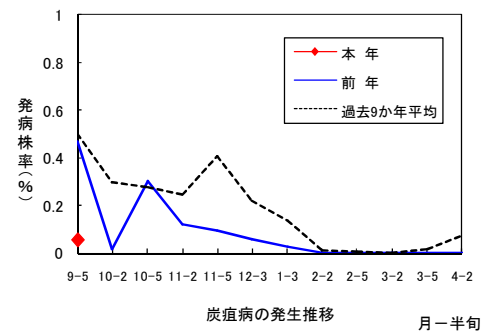
ア 発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、ほ場外に持ち出し処分する。

イ ビニル被覆までは、ハウス内で新たに感染する可能性があるため、定期的に防除を行う。

ウ ハウス内の排水を回り、多湿にならないようにする。

エ 無病親株の確保のため、余り苗は使用せず、ビニル被覆期以降に発生する秋期ランナーより採苗する。

オ 農薬の使用及び散布にあたっては、P8の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫においても同様）。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

寄生株率 1.9%（過去9か年平均 4.2%、前年 4.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

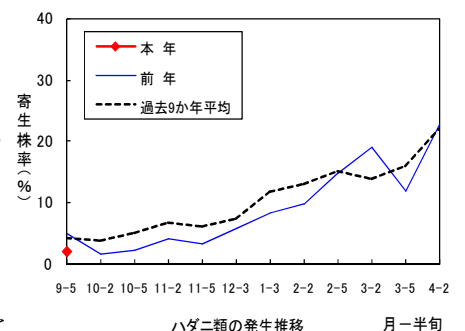
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。また、摘葉した葉や除去した雑草は、ハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

ウ ハウス内と周辺ほ場の除草を徹底する。

エ ビニル被覆後に天敵を利用する場合は、天敵類への影響が大きい有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



【野菜：共通】

1 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量： 平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、ナスでの発生量は平年よりやや少なかった（－）。

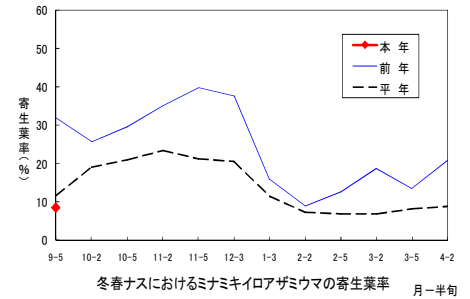
寄生葉率 8.5%（平年 11.7%、前年 32.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。

イ 防虫ネット（0.4mm目合い以下）を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。



2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下3か所のフェロモントラップにおける9月1～5半旬の合計誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（－）。

筑紫野市 1,271頭（過去8か年平均 2,136頭、前年 1,271頭）

柳川市 3,103頭（過去4か年平均 4,572頭、前年 5,577頭）

行橋市 1,063頭（過去3か年平均 670頭、前年 341頭）

※グラフについては、【普通作：大豆】のハスモンヨトウの項を参照

イ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年よりやや少なかった（－）。

寄生株率（本ば）0.9%（平年 1.8%、前年 0.4%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 孵化直後から3齢幼虫期までに、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 卵塊や分散前の、若齢幼虫が群生しているかすり状の葉は、見つけしだい除去する。

エ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

オ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。

3 オオタバコガ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下6か所のフェロモントラップにおける9月1～5半旬の平均誘殺虫数の合計は33.2頭で、平年よりやや少なかった（平年 52.0頭、前年 33.3頭）（－）。

イ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年よりやや少なかった（－）。

寄生株率（本ば）0.5%（過去9か年平均 0.7%、前年 0.7%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並より高く、降水量は平年並とされている（＋）。

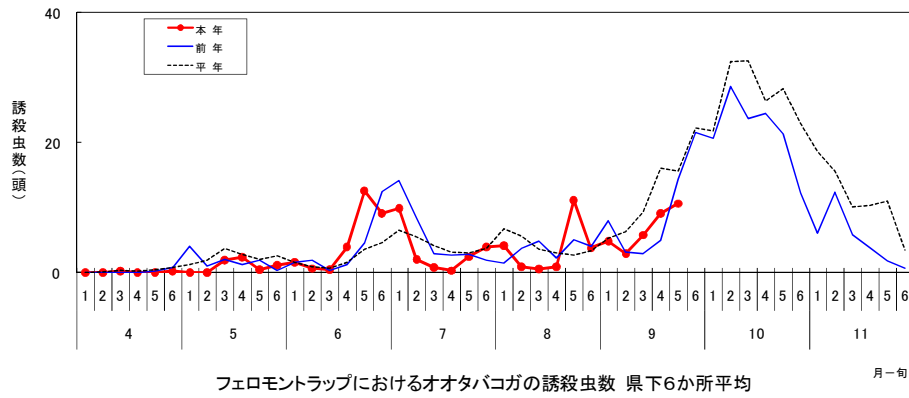
(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢以降の幼虫は、未熟果や結球部位に食入するため、薬剤がかかりにくいので、早期発見に努め、孵化直後の幼虫を狙って防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ うどんこ病	並	並	並	・ビニル被覆前後は発生が多くなるので、定期的な予防防除を徹底する。
アスパラガス 斑点性病害	やや多	やや多	並	・過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 ・ハウス内と周辺ほ場の除草を徹底する。 ・発生状況に十分注意し、定期的に防除を実施する。 ・早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
アザミウマ類	多	多	並	
チョウ目 (ハモンヨトウ・材タバコガ)	少	やや少	少	
野菜共通 コナジラミ類	やや少	並	やや多	・早期発見に努め、初期発生の際に防除を徹底する。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/>
電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では農薬の安全かつ適正使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・有用昆虫・河川等に対する配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬ラベル確認の徹底

(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数・有用生物〈みつばち等への影響〉)

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 散布前における情報提供の実施

(散布区域に近接するほ場、住宅地、養蜂等の関係者、他)

3 散布時には近隣作物や住宅地等周辺への飛散防止を徹底

- ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
- ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
- ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意

4 水田除草剤や本田粒剤は、使用后7日間の止水を遵守

- ・落水・かけ流しをしない。

5 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄

6 防除履歴の正確な記帳

- ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳

7 空容器の処分

- ・空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。
また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。